

「竹内街道」案内板と橋の風景

西田 孝司 (松原市文化財保護審議会)



▲竹内街道の清堂川に架かる岡橋 (旧板橋) (岡1丁目)
(下左)板橋 (下中)町下橋 (下右)伊勢橋



▲「竹内街道」案内板 (右:表面 左:裏面)
岡5丁目・松原南コミュニティセンター・寛政9年道標前。



日本遺産・竹内街道の地名 茶屋と板橋・町下・イセ川

飛鳥時代の推古天皇二十一年(六一三)に設置され、日本最古の官道(国道)といわれる竹内街道が四月後半、文化庁が定める日本遺産に認定されました。大阪府内では初めてのことです。古代は丹比道とよばれ、大阪市の難波宮(中央区)から大和・明日香村(奈良県)の飛鳥宮に至る大道が、近世以降、竹内街道として整備されていってと推定されています。堺市・羽曳野市・太子町などとともに、市域でも南部の岡・立部地域の約一・五キロの距離を東西に走っています。

なかでも、竹内街道と中高野街道が交わる岡五丁目の松原南コミュニティセンター前は松原茶屋ともいい、竹内街道もこのあたりでは茶屋筋とよばれていました。寛政九年(一七九七)五月に伊勢講の人々によって建てられた高野山(和歌山県)や大和を刻む道標が二基、近接して見られます(「歴史ウォーク」139)。

五月末、「まつばらまちの案内人」のみなさんは、竹内街道の日本遺産を記念して、コミュニティセンター前に市の協力を得て、案内板を建てました。ケヤキ材の表面に「竹内街道」、裏面に「河内国竹内街道」と彫っています。今年になって完成した阿保四丁目の「長尾街道」と「中高野街道」の案内板に

続くものです(「歴史ウォーク」236・239)。同地が茶屋筋とよばれるように、竹内街道沿いには江戸時代以降、伊勢参りや大峰山あるいは高野山参詣の人々や大和と大坂・堺方面を行き来する商いの人々などのための宿屋や料理屋が並んでいました。「かごや」や「おのや」などが知られていますが、今では取り壊され、当時の面影は見られません。

しかし、茶屋という言葉は江戸時代ごろからあったようです。もとは豊臣秀吉が各地で実施した文禄三年(二五九四)十一月の検地の際の岡村の写しに、その名が出てきます。写しは、年号はありませんが、江戸時代半ばごろに書かれたと思われる。付箋が至るところに貼られ、文禄三年時から写された時期までに変わった所有者名などを追記しています。

史料の表紙は、『文禄三年十一月吉日 河内国丹北郡松原郷内岡村御検地帳』とあります。岡村の畑の上や中などの等級、面積、石高、作人などをしてしたもの。このうち、作人の居住地が「おか」とか「新堂」などあり、秀吉時代には「茶屋」の名は見られません。しかし、写された江戸時代の追記の付箋には「茶や 為右衛門」や「茶屋 喜右衛門」のほか、「茶やまへ 八兵衛」「ちやノうしろ 久右衛門」「茶や後 忠兵衛」など茶屋地の作人の名が記されています。小字図を見ると、コミュニティセンターを中心とした地が茶屋のある「岡」

で、街道の南側が「茶屋前」、北側が「茶屋後」とあります。江戸時代、人々の行き来が盛んになるにつれ、茶屋が建てられ、地名となったのでしよう。

同「御検地帳」には、茶屋名と並んで、「いたはし 四郎右衛門」「いたはし 弥三 右衛門」など、「いたはし」の地名もありません。現在、竹内街道の下を清堂川が南北に流れ、道を横切る橋は「岡橋」と呼ばれています。しかし、元来は平成元年(一九八九)三月、清堂川の改修で橋が付け替えられるまで、同橋は「板橋」と呼んでいました。江戸時代から続く由緒ある小字名で、街道付近を「板橋」と称しています。ただ、「岡橋」と改名された「板橋」は街道のすぐ下流に同月に新橋が架けられましたが、その橋にこの「板橋」の名を移したのです。「板橋」名が復活したのはいいのですが、歴史的には竹内街道上に名を戻すのが自然なのです。

現「板橋」のすぐ北側には「町下橋」(昭和六十三年竣工)と「伊勢橋」(昭和六十二年竣工)も架けられています。この橋名も、小字名「板橋」の北側に並んで見られる「町下」や「イセ川」の小字名にちなんで付けられたものです。竹内街道が伊勢参りの道であったことから、イセの名が残ったのでしようか。竹内街道を散策する時、こうした「茶屋」「板橋」「町下」「イセ川」といった古くからなじんできた地名に触れると、いっそう興味もわくことでしょう。